

	名古屋大学農学部 同窓会報	発行所	名古屋大学農学部同窓会 名古屋市千種区不老町 http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/
	セコイア通信	編集人	中川弥智子・谷口光隆
		発行人	板谷精三
		印刷所	株式会社 クイックス

農学部及び生命農学研究科の近況

名古屋大学農学部同窓会 名誉会長 服部重昭
(農学部長・生命農学研究科長)



農学部同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃から農学部及び大学院生命農学研究科の教育研究活動等にご理解とご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

国立大学が法人化して第1期6年を終了し、平成22年度から第2期中期目標・中期計画期間に移りました。法人化は大学に様々な影響を与えたことは事実ですが、その評価は分かれるように思います。ただ、社会、経済、人の流れなどがグローバルにまた急速に変化する中で、大学の教育、研究及び社会貢献等の在り方にも変化を求められていることは間違いないところです。そのため、教育研究の現場でも競争、選択と集中が加速する傾向がある一方で、多様な主体との連携が模索されています。大学は社会や学生からの負託に応えるために、その個性や機能をさらに明確化することで、教育・研究等の目標・計画を具体化し戦略的に展開することがますます強く求められています。そのため、名古屋大学では総長の指導の下に「濱ロプラン」が策定され、第2期中期目標・中期計画期間はこのプランに沿って教育、研究、社会貢献などが進められます。「濱ロプラン」の詳細は大学ホームページ (<http://www.nagoya-u.ac.jp>) に掲載されておりますので、一度ご覧いただければと思います。

わが国が持続的に発展することを目指して策定された、新成長戦略におけるアクション・プランや第4期科学技術基本計画において、重要な柱として2大イノベーションの推進が掲げられています。一つはグリーンイノベーション、もう一つがライフイノベーションです。わが国が世界を牽引しながら成長する上での基軸となる科学技術分野として、環境やエネルギーを対象としたグリーンと医療、介護、健康を対象としたラ

イフが指定されたこととなります。農学部・生命農学研究科の教育研究の柱は食、環境、健康であることから、これらの分野はともに農学や生命農学と密接に関わる学問領域であり、その貢献が社会から大いに期待されているといえます。そのため、これまでに積み上げた研究成果・情報を再評価するとともに、培ってきた教育研究ネットワークを拡充させることにより、これまでより大きな研究の枠組みと高い研究到達目標を設定し、研究科が一体となって研究を推進することが強く求められています。農学部・生命農学研究科の底力を発揮する時期をまさに迎えていると思います。

そのような中で、現在、農学部の講義棟の耐震改修工事で研究棟「理農館」の建設工事が行われています。後者は理学部との共同研究棟です。講義棟は本年3月に完成予定で、4月からは設備等も新しくなった教室で講義が行われます。また、研究棟は今年の夏頃に完成予定で、手狭であった研究環境に少しゆとりが生まれるものと期待しております。また、昨年度の本会報でもご紹介いたしました、グローバル30(国際化拠点事業)の準備があわただしくなっています。平成23年10月の入学生受け入れを目指して、学生の募集・入試、外国人教員の国際公募、シラバスや授業時間割の作成、年間行事予定の編成などが着々と進行しています。近年、留学を希望する若手研究者や学生が減少し、内向き志向が指摘されることもありますが、外国で学ぶことを希望している学生や若手研究者は潜在的には多いものと考えています。グローバル30の活動のみならず、海外の大学、研究機関などとの多面的な連携を通して、教職員や学生のモチベーションをさらに高められるよ

うな国際化の方向を見定めて行きたいと考えます。平成23年度も例年通り、6月上旬に名大祭、10月中旬に第7回名古屋大学ホームカミング・デイが予定されていますので、是非イベントにご参加いただければと思います。そんな折に、農学部・生命農学研究科の変化を見ていただくとともに、教育研究活動等についてご意見を伺えればと思います。

昨年11月に農学部同窓会関西支部総会に参加する機会を得ました。会員相互のチームワークの良さや温かい支部の雰囲気を感じるとともに、支部会員の皆様が国内外の多様な環境の中で活躍されていることを伺い、大変心強く思いました。会員の皆様のますますのご活躍と農学部同窓会のご発展を祈念いたします。

名古屋大学農学部同窓会長あいさつ

板谷 精三（林産1970年卒）



我々、団塊の世代は世界に例を見ない超少子高齢化社会の先駆けですが、丁度引退する時期になりました。国内産業の閉塞感は厳しいものがあり、国内の伸びが期待出来ない以上、海外市場の開拓が全産業の課題になっています。日本は新興国の中でも最も市場規模の大きな中国やインドにも近く、極めて有利な環境です。長年、海外市場開拓の仕事を経験して参りましたので私なりの経験をご紹介したいと思います。

昨年は中国の名目国内総生産 (GDP) が日本を抜いて世界第二位になるとの記事に驚かれた方も多いと思います。日本経済の停滞と中国の急成長が経済大国の名まで明け渡すことになった訳です。中国の成長は2020年には米国迄も抜いて世界一になるとの予測も出ているようです。これまで国内市場だけに依存していても成長出来た時代は過ぎ去り、好むと好まざるに関わらず新興国と関係を持たなければならない時代が来ているようです。

中国とのビジネスは10年間近く関わって参りました。その前にやはり10年間台湾市場をくまなく回った経験があり中国社会に対する違和感は一切ありませんでした。しかし、中国人と一言で表現することはできず、省単位が国と同じ規模であり56民族が暮らす多民族国家です。地域性も異なり南方人は頭がよく勤勉だが人を騙し、北方人はいつも食事や酒席のことを考えているとも言われています。やはり、信頼出来る人との出会いがビジネス成功の条件であると思います。我々としてはパートナーの人物を見抜く目を養わないと成功はおろか大きな損失を被ることも充分にあります。

前職での経験ですが浙江省の竹関連の重要な顧客開拓には3年もかかってしまいました。竹の加工は中国

では長い歴史があり、独自の設備や刃物を使用していました。我々が新しいシステムを紹介し採用して頂く上で、やはり価格が大きな壁になりました。いかに薄い鋸で歩留りが向上しても初期投資が大きく採用出来ないとの担当者の判断で先に進まなくなってしまいました。そこで経営トップと直接交渉して我々はシステム全体を提供し顧客はシステムの使用量を支払うことで合意することが出来ました。その経営者が関係業界の理事長で大学等とも連携している優良企業のオーナーで信頼出来る人柄であったことが、我々の新しいビジネスをスタートさせてくれました。この新しいシステムにより顧客も総コストが下がり我々も利益率や回収の面でメリットがあり、現在も友好的にビジネスを継続しています。

我々日本人はオイルショックも円高不況も知恵と努力で何とか乗り越えて来ており、今回の世界同時不況も必ずや克服することが可能であると確信していますが、経済大国だけが国の誇りではなく日本人特有の心の豊かさを維持して行きたいと願っています。

最後に私事で恐縮ですが、昨年の6月に40年間勤務した兼房株式会社を退任し、現在は国内最大手の建材メーカーである大建工業株式会社の技術コンサルタントに就任しました。これまでと比較し事業規模も企業体質も全く異なり新鮮な刺激を受けている処です。これからもう少し木材工業あるいは住宅産業に関わらせて頂くことになりましたので宜しく申し上げます。

会員各位の益々のご健勝をお祈りしてご挨拶にさせていただきます。

平成23年度名古屋大学農学部同窓会 総会、講演会、懇親会のご案内

農学部同窓会総会、講演会、懇親会を下記の日程で開催します。みなさまお誘い合わせの上、ふるってご参加下さい。講演会、懇親会のみ参加も歓迎いたします。

○期 日：平成23年6月4日(土) *名大祭期間中*

○総 会

時間：午後2時～3時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○講演会

(独) 森林総合研究所 研究コーディネータ・REDD 研究開発センター長

松本 光朗 氏 第28回(昭和57年3月)農学部林学科卒

「地球温暖化対策としての森林経営・木材利用」

地球温暖化対策としての森林経営・木材利用について概論するとともに、講演者が行ってきた京都議定書報告のための森林による炭素吸収量の算定・報告手法と国家森林資源データベースの開発、REDD+ (熱帯林の森林保全) のための取り組みについて解説する。

時間：午後3時～午後4時

場所：名古屋大学農学部 第3講義室

○懇親会

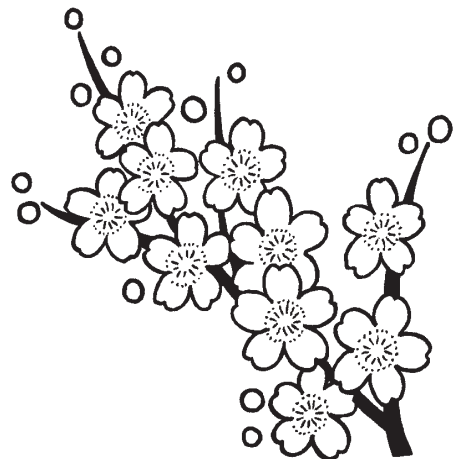
時間：午後4時30分～6時30分

場所：名古屋大学内“花の木”

会費：1,000円

同窓会を開きませんか!?

農学部同窓会総会を機に、久しぶりに農学部に集まって同窓会を開催しませんか? 農学部同窓会の懇親会を1次会としてご利用いただくことができます。是非、同窓会事務局 (dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp) まで事前にご連絡下さい。必要に応じて、同窓会ホームページを掲示板としてご利用いただくこともできます。



もうその時が、、

生物化学 中村 研三



正直、まだ若いと思っていたのに、もうその時がきたのか、というのがこの数年間持ち続けてきた感想でした。しかし、退職記念講演も終えていよいよとなった今は、まずはこうして27年間の名古屋大学農学部、大学院生命農学研究科での職務を無事に終わらせることにほっとしています。

私は、1966年（昭和41年）に名古屋大学農学部農芸化学科に入学し、瓜谷郁三先生の生物化学研究室で1年遅れの1971年3月に卒業しました。大学院修士課程では旭正先生のご指導を仰ぎ、博士課程では醗酵化学研究室に籍を移して、水島昭二先生のご指導を得て1976年に博士号を取得しました。その後、5年間をニューヨーク州立大学でポストドクおよびリサーチレクチャーとして過ごし、更に2年間を三菱化成生命科学研究所で副主任研究員として過ごした後の1983年の6月に生物化学研究室の助教授として赴任しました。名古屋大学農学部でお世話になったのは38年間ということになります。

生物化学研究室では、農学の基礎となる植物の生命現象を取り上げて分子レベルでの解明を目指すという、瓜谷先生以来の研究室のスタンスを守り、サツマイモという主な研究材料も継承しつつ、研究内容は新たに分子生物学を導入して植物の栄養貯蔵機能に焦点をあてました。「いもがふくらむとき」をキャッチフレーズに、イモに大量に貯蔵される貯蔵タンパク質の遺伝子発現制御機構とその液胞への輸送機構の解明を目指して研究を始めました。タバコやパレイショへの遺伝子導入技術を使ってこれら塊根貯蔵タンパク質遺伝子の転写活性化には、細胞への豊富な糖栄養源の供給が重要なトリガーになることを明らかにし、形質転換タバコ培養細胞を使った研究から、貯蔵タンパク質前駆体の細胞内でのプロセッシングと修飾の全容を解明し、前駆体の液胞への選別輸送に関わるシグナルを同定しました。その他、パレイショ塊茎の自己防御遺伝子のジャスモン酸による誘導や、タバコ培養細胞でのジャスモン酸によるニコチンの誘導合成などにも熱中

しましたが、1995年から5年間、岡崎の基礎生物学研究所の発生生物部門客員教授を併任する機会を得たこともあり、次第に研究の中心はシロイヌナズナを使った糖応答性遺伝子発現制御の遺伝学的研究にシフトしていきました。従来と違う突然変異株スクリーニングを心がけ、幾つかユニークな突然変異株を見いだして、それまで未知の遺伝子機能を明らかにできました。シロイヌナズナを使うことで自然と種子での栄養貯蔵が研究対象となり、更に、糖応答に関わる転写因子として幾つか油脂貯蔵に重要な役割を担うものを明らかにしたこともあり、このところの研究の焦点は種子での油脂貯蔵になっています。定年を間近にした1、2年前から、本学遺伝子実験施設の石浦正寛教授らが開発したハイスループット生物発光モニタリングシステムを使い、油脂の合成や貯蔵に関わる遺伝子プロモーター下流で発現するルシフェラーゼ（LUC）をモニターして、数十万個体のスクリーニングから種子油脂貯蔵関連遺伝子の発現に異常を示す突然変異株を大量に取得しています。この4月からは、中部大学応用生物学部の方で、引き続きこれら突然変異株の解析を進める予定にしています。

さて、冒頭でも述べたように、私は一年遅れで卒業しており、そのために入学時と卒業時の両方の同級生に恵まれた幸せ者です。入学時同級生組の名古屋近郊在住のもの10名ほどで、毎年ではありませんが、寛一お宮ならぬ「12月30日の午後6時に栄地下街クリスタル広場」、と日時を決めて集まり、忘年会を楽しんできましたが、そろそろ遠くの人も集まってもらえるように、別の機会に集まろうという話になってきています。また、昨年から卒業時同級生の方々からも同窓会の連絡を頂いており、多くの方々と旧交を温めるのを楽しみにしています。

卒業生の言葉

研究活動@マレーシア

生物環境科学科 森林生態生理学研究分野 大島千明



4年生の7～10月までの3ヵ月間、熱帯で研究漬けになっていた日々は、忘れられない思い出の一つとなりました。

3年生の2月、希望していた「4年生でも海外で研究できる」研究室に配属が決まり、ピークを迎えつつあった就職活動に追われながらも、熱帯林の研究を始めました。

指導教員の中川先生や研究室の先輩方が調査地としていたのは、マレーシア・ボルネオ島北部に位置し、世界一多様な植生を持つといわれるランビルヒルズ国立公園の熱帯雨林でした。この辺りの森の植物は、何年かに一度、他の多くの種と時期を合わせて開花・結実するという繁殖戦略をとっています。不思議ですね～♪私が研究室に配属された年は、幸運なことに、ちょうどこの「一斉開花」現象が起こっており、これを研究テーマとすることができました。熱帯林の多様性の謎にも通じるもので、名古屋で生物多様性 COP10が開催されたこの年、最もホットで面白い研究の一つであったと思います。

滞在中は、鬱蒼と茂った森の中、道なき道を歩き、ほぼ毎日5、6時間種子や芽生えの調査を行いました。猛烈にかゆい蚊やダニ、また暑さや湿度との闘いのハードな日々でした。仕事を手伝ってくれていたワーカーのダグラスとは同い年で、つたないマレー語や英語を使いながら、初のアフリカ開催となったFIFAワールドカップの話題などでいつも盛り上がっていました。木や果物、ブタなどの森の恵みを活用し、森と共

に生きる、彼らイバン族の昔ながらの生活の様子を聞くのは、滞在中の大きな楽しみでもありました。異なる環境で、一流の研究者や他大学の仲間たちと共に暮らし、研究に打ち込んだこの3ヵ月間は、私にとって非常によい経験となりました。

このように充実した学生生活を送れたのは、両親や先生方、友人を始めとする本当に多くの方々のお陰に他なりません。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。Terima kasih(マレー語で、ありがとうございます)。

4年間を振り返って

資源生物科学科 生物相關防衛学研究分野 千賀紀尚



大学に入学してから卒業までの4年間を振り返ると本当に様々なことがありました。実験実習、講義、部活動など、大学でしか得られない経験を数多くできたと感じています。中でも、強く心に残っていることは3年次に行われた実地研修、そして4年次の研究室での生活です。

実地研修には国内実地研修と海外実地研修があり、どちらも自由選択でしたが、農学部ならではの体験をしてみたいと考え両方に参加しました。国内実地研修では、日常的な業務に加え、職員の方とプレゼンテーションの討論をしたり、これからの日本の農業について話したりしました。普段の大学生活ではそういった職員の方々との接点はないので、貴重な体験ができたと思っています。海外実地研修では、一週間カンボジアに滞在し現地の大学生とグループを組んでフィールドワークを行いました。自分にとって初めての海外だったので不安もありましたが、先生方や同級生のサポー

トもあり、充実したものとなりました。考え方や文化の異なる現地の学生と英語で話し合い、ともにプレゼンテーションを作るという作業は大変でしたが、このような体験をしたことがなかったのととてもためになったと感じています。また、このときに知り合った学生とは現在もネットで連絡をとっています。海外実地研修に参加しなければカンボジアの学生と知り合う機会もなかったと思うと参加して良かったと思っています。

4年次には研究室に配属され3年次までとは異なる大学生活になりました。3年次までは講義を聴くことが主でしたが、4年次では自分の研究テーマに沿って実験や勉強をするというスタイルに変わりました。初めてのことが多く分からないことばかりでしたが、先生、先輩方には研究に関するだけでなく、プレゼンテーションの方法や一般的な常識など、様々なことを厳しくそして優しく指導していただきました。現在、病害虫に対する植物の防御応答について研究を行っています。研究についてはまだ分からないことも多いですが、そこがおもしろいところであると感じています。大学卒業後は大学院に進学し、研究を続ける予定です。これからの研究で何か成果を残せたらと思っています。

最後に、親身に指導していただいた先生方、先輩方、支えてくれた仲間、そしていつも温かく見守ってくれた家族に深く感謝の言葉を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

卒業を迎えて

応用生命科学科 栄養生化学研究分野 片山 貴裕



初めて名古屋に足を踏み入れた4年前、大学生活という新たな環境の何もかもが新鮮で楽しみだった一方、ここでうまくやっていけるのだろうかと不安もいっぱいだったあの頃を今、懐かしく思えます。4年

経った現在では農学部でできた友人と楽しく毎日をご過ごしています。

1年生の時、運動が好きな私は新しくできた友人と農学部のバスケットボールサークルに入りました。個性豊かな先輩方と後輩を含めた多くの人と親交を深めることができました。また、競技を楽しむ以外にも部長を務めました。方向性の違いからなかなか上手く運営できず悩んだこともありましたが、周りの力を借りながらやっていくことができました。その甲斐もあって1年生時には小さなサークルでしたが今では多くの農学部生が所属するサークルとなりました。長期休みには合宿に行ったり、試合に出たりと大学生活の中でとてもいい思い出になりました。それと同時にここでの体験から集団をまとめることの難しさ、リーダーシップの大切さを学び、人間的に成長できたと思います。そしてここで出会った人たちをこれからも大切にしていきたいです。

4年生になると研究室に配属され今までとは全く違った生活を送るようになりました。自分の研究テーマを持ち、計画を立てて実践していく。初めてのことがばかりでなかなか上手いかず、悔しい思いもしましたが先生方や先輩方のご指導で徐々に壁を乗り越えながら研究を進めています。私は大学院に進学し、肥満と分岐鎖アミノ酸の代謝をより深く研究していきたいと考えております。

改めて今、この4年間で早かったと感じます。農学部でともに過ごした同期は今春社会に入る人も大学院に進む人もいます。方向性は違えど同じ空の下でこの4年間を糧に頑張りましょう。最後にこの4年間をともに過ごした友人、親身に相談に乗っていただいた先生方や先輩方、そして熊本から名古屋大学に出してくれた家族に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

名古屋大学での6年間

生命農学研究科 応用分子生命科学専攻 動物栄養情報学研究分野
岩永耕一郎



期待と不安を胸に迎えた入学式の日から、早6年が過ぎようとしています。高校から大学への環境の変化は想像以上に大きく、入学からいくつの新しい出会いと経験があったかわかりません。6年間を経て今の自分があるのは、その中でも特に入学後4年間打ち込んだ合唱団での活動と、研究に取り組んできた4年次からの3年間があったからだと振り返ります。

元々音楽に興味があり、入学後私はサークル活動として学内の合唱団に入団しました。体一つで音楽を作る面白さに加え、4年間を通じて最も実感できたのは、人と深く考えを共有することの喜びや難しさ。特に3年

次の1年間は、中心として団を運営する立場を務める中で多くを学びました。数多くの価値観が交錯する中で一つのものを作り上げることは容易ではなく、意思疎通が上手くいかず苦しむこともありましたが、それでも、困難を乗り越え演奏会を終えた時の達成感や皆への感謝の気持ちは、今後も決して忘れることはありません。

4年次の研究室配属では、生きていく上で誰にでも身近な栄養学という分野に惹かれ、この研究室を選びました。細かく決めたスケジュールの中で動物を飼育する研究は、データとしては表れない地道な作業や時間的な制約を多く伴い難しいものでしたが、そこから導かれる結果や予期しなかった発見は他にはない刺激となり、同時に心から「頑張っただけ良かった」と思わせてくれるものでした。3年間懇切丁寧なご指導を頂いた先生方を始めとする研究室の方々、共に励ましあってきた友人、常に傍にいてくれた家族。順調な時もつまずいた時も近くに多くの支えがあったからこそ、無事修了を迎えることができました。この場をお借りして深謝申し上げます。

長かった学生生活を終え、まもなく私は一社会人として新しいスタートを切ります。かつてない壁を前に立ち止まることもあるとは思いますが、この場所のできた人との繋がりや積み重ねてきた経験を大切に、今度は自分がお世話になった方々や社会に貢献できる存在となれるよう、一歩ずつ頑張っていきます。



平成22年度名古屋大学農学部学術交流基金助成事業の採択者一覧

(農学部学術交流基金助成は農学部創立50周年記念事業の一環として行われています。)

○「研究集会の助成」

・邊見 久 (准教授)

課題等：ドリコールおよびイソプレノイド研究会例
会

○「海外派遣の助成」

・小林 隆史 (動物細胞機能研究分野・M1)

・住田 瑞季 (動物細胞機能研究分野・M1)

課題等：国際シアロ糖鎖学会議 (ドイツ・ポツダム市) でのポスター発表および学術交流

人事異動 (平成22年1月～12月まで)

生命農学研究科・農学部

日付	内容	職名	氏名	備考
H22.3.31	定年退職	教授	高倍 鉄子	
〃	〃	〃	宗宮 弘明	
〃	〃	〃	大澤 俊彦	
〃	〃	〃	織田 鉄一	
〃	退職	准教授	加藤 雅士	名城大学農学部教授へ
H22.4.1	兼務	研究科長	服部 重昭	22.4.1～24.3.31
〃	〃	副研究科長	柘植 尚志	22.4.1～24.3.31
〃	〃	専攻長	山本 浩之	生物圏資源学専攻 23.3.31まで
〃	〃	〃	松本 省吾	生物機構・機能科学専攻 〃
〃	〃	〃	西川 俊夫	応用分子生命科学専攻 〃
〃	〃	〃	中野 秀雄	生命技術科学専攻 〃
〃	〃	学科長	竹中 千里	生物環境科学科 〃
〃	〃	〃	田中 利治	資源生物科学科 〃
〃	〃	〃	小林 哲夫	応用生命科学科 〃
〃	〃	研究科長補佐	前島 正義	23.3.31まで
〃	〃	〃	肘井 直樹	〃
〃	配置換	教授	前多敬一郎	農学国際教育協力研究センターへ
〃	昇格	〃	内田 浩二	准教授から
〃	〃	〃	大蔵 聡	〃
〃	採用	〃	本道 栄一	山口大学農学部准教授から
〃	〃	〃	中園 幹生	東京大学大学院農学生命科学研究科准教授から
〃	〃	助教	伊藤 智和	
H22.6.1	昇格	教授	山本 直之	准教授から
H22.8.31	退職	助教	山田 邦夫	中部大学応用生物学部准教授へ
H22.10.31	〃	准教授	松見 紀佳	北陸先端科学技術大学院大学マテリアルサイエンス研究科教授へ
H22.12.1	昇格	〃	梶村 恒	助教から
〃	〃	〃	柴田 秀樹	〃
H22.12.31	退職	〃	松林 嘉克	自然科学研究機構基礎生物学研究所教授へ

農学国際教育協力研究センター

H22.3.31	定年退職	教授	松本 哲男	
H22.4.1	配置換	〃	前多敬一郎	生命農学研究科教授から

農学部同窓会ホームページ案内

祝賀会、講演会、懇親会の模様、農学部研究室の変遷などに関する情報は農学部同窓会ホームページ (<http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/>) に掲載中です。是非ご覧ください。

平成21年度 事業報告

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成21年6月6日、名古屋大学農学部において総会を行った。総会終了後、伊藤 高明氏(住友化学株式会社 農業化学部門主幹)による講演「マリア対策用オリセットネットについて」を開催した。講演会終了後、名古屋大学内“花の木”にて懇親会を開催し、親睦を深めた。
- 2) 卒業祝賀会の開催
平成22年3月25日に農学部談話室にて卒業祝賀会を開催した。樽酒を飲み交わしながら盛会のうちに終了した。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成22年3月に発行した。
- 4) 農学部同窓会50周年記念事業～卒業50周年記念祝賀会の開催～
平成22年6月5日、名古屋大学農学部大会議室において第6回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を農学部談話室と共同で開催した。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に同窓会ホームページの充実をはかった。
- 6) 同窓会名簿の管理
平成21年度版農学部同窓会会員録を発行した。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し運営に協力した。名古屋大学基金へ寄付(20万円)を行った。

平成22年度 事業計画案

- 1) 総会、講演会、懇親会の開催
平成22年6月5日、名古屋大学農学部において総会を行う。
総会終了後、北本則行氏(愛知県産業技術研究所 食品工業技術センター)による講演「名大農学部ブランドの日本酒開発に向けて」を開催する。
講演会終了後、名古屋大学シンポジオン内“ユニバーサルクラブ”にて懇親会を開催する。
- 2) 卒業祝賀会の開催
平成23年3月25日に農学部談話室にて卒業・修了祝賀会を開催する。
- 3) 会報「セコイア通信」の発行
平成23年3月発行予定。
- 4) 卒業50周年記念祝賀会の開催
第7回卒業生の卒業50周年記念祝賀会を開催予定。
- 5) ホームページの作成と管理
同窓会員の情報交換を促進し、活動の状況を広く会員に知ってもらうことを目的に同窓会ホームページの充実をはかる。
- 6) 同窓会名簿の発行および管理
全学同窓会の名簿システムと連携し、名簿の充実と管理について改善に努める。
- 7) 全学同窓会への協力
全学同窓会幹事会に役員を出し運営に協力する。

名古屋大学農学部同窓会 平成21年度決算

【収入の部】

費 目	決 算 (円)	細 目	金 額 (円)	備 考
会 費 等	2,865,000	永 久 会 費	2,060,000	103名
		一 般 会 費	460,000	92名
		寄 付 金	300,000	66名
		広 告 掲 載 費	45,000	3名
卒業50周年祝賀会・ 談話会会費	86,000			43名
総会懇親会費	18,000			18名
そ の 他	98			利子
前年度繰越金	25,140,566			
合 計	28,109,664			

【支出の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,177,758	会報印刷・発送 振込手数料	1,176,078 1,680	10,000部 2件
総会	192,930	講師記念品代 役員交通費 懇親会費	4,650 40,500 147,780	3名
卒業50周年祝賀会	75,260	飲食代 事務費	56,480 18,780	発送
卒業祝賀会	249,530	飲食代 記念品代 振込手数料	200,600 47,250 1,680	2件
寄附	200,000			1件(名古屋大学基金)
役員報酬	132,000			11名
支部支援金	91,680	関東支部 関西支部 振込手数料	60,000 30,000 1,680	2件
名簿管理	46,131	データ投入料 振込手数料	45,291 840	1件
アルバイト代	250,000			事務補助
郵便振替手数料	28,200			
その他諸費用	25,583	課税納付 事務費	12,663 12,920	役員報酬・交通費、アルバイト代 発送、コピー
次年度繰越金	25,640,592			
合計	28,109,664			

名古屋大学農学部同窓会 平成22年度予算

【収入の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会費等	3,295,000	永一般会費 一般会費 寄付金 広告掲載費	2,400,000 500,000 350,000 45,000	120名 100名 70名 3件
卒業50周年祝賀会・ 談話会会費	100,000			50名
総会懇親会費	25,000			25名
その他	200			利子等
前年度繰越金	25,640,592			
合計	29,060,792			

【支出の部】

費目	決算(円)	細目	金額(円)	備考
会報発行費	1,300,000			10,000部
総会	260,000	講演料 講師交通費 役員交通費 懇親会費	30,000 30,000 50,000 150,000	3名
卒業50周年祝賀会	80,000	飲食代 事務費	60,000 20,000	発送
卒業祝賀会	250,000	飲食代 記念品代	200,000 50,000	
役員報酬	132,000			11名
支部支援金	90,000	関東支部 関西支部	60,000 30,000	平成22年度分 平成22年度分
名簿管理	50,000			
アルバイト代	250,000			事務補助
郵便振替手数料	30,000			
その他諸費用	70,000	役員交通費(理事会) 課税納付 振込手数料 事務費	20,000 20,000 10,000 20,000	役員報酬・交通費、アルバイト代 発送、コピー
余剰金	26,548,792			
合計	29,060,792			

名古屋大学農学部同窓会関西支部便り

加藤 寿郎(昭和45年M)

平成22年度の名古屋大学農学部同窓会関西支部総会を、11月13日、大阪弥生会館にて開催いたしました。今年の総会は、農学部同窓会名誉会長をなさっておられる学部長の服部重昭先生をお迎えして、総勢21名の楽しい会となりました。そのうち、3名の方は初参加でしたが、すぐに打ち解けて、同窓会を盛り上げていただきました。同窓会の輪が徐々にではありますが、広がってきておまして、大変うれしく思っております。

少し早いのですが、朝10時にお集まりいただき、総会議事を終えた後、早速、講演会に移りました。名古屋からわざわざお越しいただいた服部先生からは、「農学部・生命農学研究科と同窓会の近況」と題しましてご講演をいただきました。出席された同窓生一同、名古屋大学農学部の近況を懐かしく、また、頼もしく聞かせていただきました。国立大学法人名古屋大学となった後の様々な変化、ご苦労話をうかがって、大学経営の難しさを垣間見ることができました。大学予算が年々縮小し、先生方の定員数も削減せざるを得ない状況を知り、日本の将来が大変心配になりました。教育水準の高さ、技術開発の強みが今日の日本を作ったのに、予算削減ばかり熱心な政府の方針に憤りを禁じえません。厳しいお話の中にも、農学部が大学評価をお受けになり、特に研究面では非常に高い評価を受けたこと、理学研究科と合同で新研究棟を建設中であることなど、ほっとするお話も聞かせていただくことができました。

服部先生のお話の後、小生、加藤(昭和45M)から、「世界農業事情」と題しまして、お話をさせていただきました。長年、農業の研究開発に携わってまいりました



平成22年11月13日名古屋大学農学部同窓会 関西支部総会記念

ので、お話をさせていただくことにしましたが、いきなり農業のお話からではなく、導入部分では日本の食糧問題や農業問題にも触れさせていただきました。日本は今やエネルギーレベルの食料自給率が40%ということですが、こうなったのは、単に日本農業の競争力が低いということだけでなく、食生活が肉食化して米中心から大きく変わり、トウモロコシなどの飼料用農産物を多く輸入せざるをえなくなってしまったことが原因という小生の解釈を述べさせていただきました。

講演会をお昼までに終え、懇親会となりました。懇親会では、例年、参加者全員に近況を手短かに紹介していただいておりますので、約3時間と長くなりましたが、それでもアルコールも入りおしゃべりを始めますと、すぐに時間が経ってしまいます。今年は、懇親会場の各テーブルに椅子を入れ、ゆったりとお話をされるようセッティングをしましたので、腰を悪くされた方にも喜んでいただきました。最後に服部先生に中締めのご挨拶をお願いし、「来てよかった」とおっしゃっていただき、世話役として大変嬉しく思いました。記念写真撮影の後、午後3時にはお開きとなりましたが、皆さん、来年の再会を約束して帰途に着かれました。来年度の総会は11月19日(土)10時~15時、大阪弥生会館を予定しております。是非ともご参加ください。

名大遠州会だより

遠州会農学部幹事 米屋 武文(食D1980年満了)

名大遠州会は、静岡県西部(大井川以西)に居住または勤務する名古屋大学、大学院若しくはその前身校出身者から構成され、平成8年に設立されました。同窓会を毎年、総会を隔年で開催しています。平成22年は、第8回総会と第15回同窓会を6月12日(土)18時に浜松オークラクトシティホテルに94名の会員が集い、名古屋から濱口総長、伊藤全学同窓会代表幹事の来賓をお迎えして開催しました。

総会では、平成20、21年度の事業報告、会計報告の審議、承認、同時に新役員を選出、承認が行なわれました。議事終了後、新会長の庄田武さん、来賓の濱口総長、伊藤代表幹事の御三方から挨拶がありました。会場で静岡新聞と中日新聞の取材があり、後日両紙に名大遠州会第15回同窓会として掲載されました。

懇親会は、10分間の休憩を取って宴会場に移動して始まりました。卒業年代の近いグループで指定された10卓の円テーブルを囲み、長谷川裕さんの乾杯の発声



濱口総長との記念撮影

で酒宴がスタート。各テーブルには空席も用意し、テーブルを移動し世代と学部を越えた広い交流を促しました。今回は多くの初参加の若い会員や女性会員の出席があり、ボーカルとギター演奏をバックに華やいだ雰囲気が進みました。

濱口総長も各テーブルを回って親しく歓談されたり、一緒に記念写真に入って頂いたりして大いに盛り上がりました。それから、21時頃に三谷副会長の閉会の挨拶があり、一本締めで閉会となりました。

多くの出席者から、総長のお話によって名大の現状がよく理解でき、懇親会では世代を越えた会話が弾み、とても楽しい同窓会であった、来年も是非参加したいとの声がありました。出席されていない方々にも次回は是非出席していただくよう、さらに工夫していくことを後日の役員会で話し合いました。

さて、本年は第16回同窓会をオークラクトシティホテル浜松にて、6月11日(土)17:30に開催予定です。また、当日特別企画として、ノーベル物理学賞受賞の益川敏英先生の講演会をアクトコンgresセンターで15:00から16:30まで予定しております。3月下旬から4月上旬頃に案内状を郵送しますので、奮っての御参加をお願いいたします。

連絡先：遠州会農学部幹事 米屋武文

〒430-8533浜松市中区中央2丁目1-1

静岡文化芸術大学文化政策学部

Tel/Fax：053-457-6174

Email：yoneya@suac.ac.jp



農学部の話題 —2010.01.01 ~ 2010.12.31—

〔「名大トピックス」より許可を得て農学部関係の一部を記載〕

- 門脇辰彦生命農学研究科准教授は全国の養蜂場でミツバチのウイルス感染状況を調べ「国内でも海外同様に感染が広がっていることがわかった」と話す 2010.1.5朝日(朝刊)
- 名大サロンの主役：山本進一生命農学研究科教授が「森は生きている—森林のギャップダイナミクスと多様性維持のしくみ」と題して講演 2010.2.16中日(朝刊)
- 山本進一生命農学研究科教授は「生物多様性を支える市民・地域による戦略的地域づくりビジョン」の策定に参加する 2010.3.1中日(朝刊)
- 東山植物園「キッズ ボタニカル・ラボ」開催：26日 小俣達男生命農学研究科教授らが子どもたちの実験を指導 2010.3.30中日(朝刊)
- 松見紀佳生命農学研究科准教授はリチウムイオン電池の性能を従来の10倍以上に高めることができ、燃えにくく安全性も高い電解質を開発する 2010.4.1日刊工業 2010.4.2中日(朝刊)
- 藤田祐一生命農学研究科准教授らの研究グループは植物や藻類の中で葉緑素が緑色になる反応の仕組みを解明する 2010.4.19中日(朝刊) 他5社
- 安坂幸師工学研究科助教、黒田俊一生命農学研究科教授はキャノン財団の研究助成プログラム「産業基盤の創生」の研究助成対象に選ばれる 2010.4.19日経(朝刊)
- 宗宮弘明生命農学研究科教授は河村たかし名古屋市長就任1年を振り返り「結局何も変わらなかった」と述べ、小野耕二法学研究科教授は「話題性が先行した感じはするが結果的に議会を動かし、オープンな場で行われた議論は市政への関心を高めるきっかけになったはず」と一定の評価をする 2010.4.24読売
- レーザー：藤田祐一生命農学研究科准教授は「ネイチャー」に研究成果が掲載されたのを弾みに研究スピードを加速する 2010.4.27日刊工業
- 新美輝幸生命農学研究科助教は愛知学院大学のモーニングセミナーで「テントウムシから生物多様性を考える！」と題して講演する 2010.5.10中日(朝刊)
- 牛乳市民講座「ミルクですこやかな毎日を」開催：6月13日 松田 幹生命農学研究科教授が基調講演を行う 2010.5.15中日(朝刊)
- 芦苺基行生物機能開発利用研究センター教授の研究グループがイネ収量増加遺伝子を発見 2010.5.24中日(朝刊) 他3社 2010.5.25日経(朝刊)
- 松見紀佳生命農学研究科准教授らの研究グループ ウコンに含まれる天然色素クルクミンを使用し効率的に発電できる太陽電池の開発に成功 2010.5.26中日(朝刊)
- 門脇辰彦生命農学研究科准教授はハチが抱えるストレスを遺伝子レベルで調べ、ビニールハウスに入れた後のハチが強いストレスにさらされていることを解明し、「ハチ自身はストレスと感じていないだろうが、体は高ストレス状態にある。働きつめのサラリーマンのよう。群れを長持ちさせるために、ストレスを減らすことが必要」と訴える 2010.5.28中日(朝刊)
- 関市でミツバチが突然20万匹死んだ原因調査のため、生命農学研究科に現場写真やハチの死骸が送られる 2010.6.4中日(朝刊)
- 名大サロンの主役：大場裕一生命農学研究科助教が「生物発光の科学—ダーウィンから下村先生まで」と題して講演する 2010.6.29中日(朝刊)
- 第115回博物館特別講演会「熱帯雨林の生物多様性」開催：29日 中川弥智子生命農学研究科准教授が講演 2010.7.27中日(朝刊)
- 吉村 崇生命農学研究科教授ら ウズラの脳深部で光を感知する新規な視物質「オプシン5」を発見 2010.8.3中日(朝刊) 他2社
- 中川弥智子生命農学研究科准教授は東南アジアにおいて植物の花などが集中する「場所」と「時間」について解説する 2010.8.7中日(朝刊)
- COP10 社会と学術の対話フォーラム「生物多様性を主流に」開催：9月4、5日 林 希一郎エコトピア科学研究所教授、竹内恒夫環境学研究科教授、林 良嗣同教授がコーディネーターを務め、西川芳昭国際開発研究科教授、山田容三

- 生命農学研究科准教授、渡邊幹彦環境学研究科特任教授が話す 2010.8.15中日（朝刊）
- 講演会「生物多様性とは何だ!？」開催：7日 戸丸信弘生命農学研究科教授が講演 2010.8.16中日（朝刊）
- 門脇辰彦生命農学研究科准教授は、現在人間の都合で崩れてきている花とミツバチの関係に言及し、調和のとれた生態系を作り出す必要性を訴える 2010.8.27中日（朝刊）
- 松林嘉克生命農学研究科准教授らのグループ 植物の根の成長を支える新しいホルモンを発見
2010.8.27中日（朝刊）他3社 2010.8.28赤旗
- 門脇辰彦生命農学研究科准教授ら ミツバチが温度や忌避物質を感じるメカニズムを世界で初めて発見
2010.9.15中日（夕刊） 2010.9.16読売他2社
- 下村吉治生命農学研究科教授は駅伝における理想的な給水方法について『水分補給』と『エネルギー補給』とに分ける。また、練習、レースの前半と後半で飲むものを変える」という提案をする 2010.10.20朝日（朝刊）
- 松田 幹生命農学研究科教授のグループは精子受容体分子のX線結晶構造解析に世界で初めて成功し、卵被膜の構築および精子との相互作用の分子メカニズムを解明する 2010.10.22読売 中日（朝刊） 2010.10.27日刊工業
- 海老原史樹文生命農学研究科教授は、文部科学省のスーパーサイエンスハイスクールに指定された名古屋市立向陽高校の研究発表を聞き、「研究は大学生でも通用するレベル。研究の結果を裏付けるには、実験の回数や統計的な処置を増やすことが大切だ」と話す 2010.10.28中日（朝刊）
- 竹中千里生命農学研究科教授はCOP10の意義を語り継ぐシンポジウムで「虫を食べるラオスの人には森を守る大切さが染み付いている。食を通じ、自然に目を向けてほしい」と話す 2010.11.28中日（朝刊）
- 松岡 信生物機能開発利用研究センター教授らは1つで収量を増やし、倒れにくくするイネの遺伝子を発見する
2010.12.1中日（朝刊）他2社
- ニュースはてななるほど：松岡 信生物機能開発利用研究センター教授らが開発した新品種のコシヒカリが紹介される
2010.12.18中日（朝刊）

同窓会寄付者一覧

本年度、農学部同総会に対し以下の方々より寄付金をいただきました。ありがとうございました。（敬称略）

浅井 武重	旭 正	安益公一郎	石河 正則	石黒 正彦
伊藤 憲一	伊藤祐里恵	岩瀬 保夫	上田 幹夫	鶴高 重三
梅村（永津）武夫	大岩 仁志	大元 英司	奥村 純市	尾崎 高弘
小原 郁夫	春日井啓之	片岡 順	加藤 壽郎	金光 桂二
川合 菜加	菊池 裕之	北川 紀雄	櫛田 道子	九島 昌彦
栗本 重夫	河野 恭廣	近藤準之助	笹尾 幸夫	品川 哲郎
白石 典久	新海 義秋	須藤 千春	関谷 香澄	高田 誠
高橋（山崎）登枝子	多賀 正明	瀧口 素行	館本 篤志	館本 勲武
田中 宏	谷口 武	築山 孝弘	築山（鈴木）葉子	寺澤 眞
寺本 昭二	豊崎（岩田）牧子	中野 元	成瀬 和也	野田（内田）裕子
野々山彰人	長谷川達也	長谷川洋吉	林 和男	林 憲志
原 睦美	樋口 春三	人見（大竹）英里	平井 篤志	平林 良一
広田 知敬	福本 英人	福山 透	古川 壽久	古田 隆則
前田（小竹）美恵子	松田 克文	三嶋 隆	宮川 真仁	宮野 哲次
村田 聡子	森下二三夫	安井（近藤）奈緒	安川 拓次	山木 昭平
山下（水野）貴子	山田 茂裕	山根 恒夫	横井 伸二	吉田（松本）康
和田 富吉	渡辺 広次	渡邊 徹	JOHN ROSS GATHRIGHT	

全学同窓会について

名古屋大学全学同窓会は、卒業生だけでなく名古屋大学関係者すべてを構成員とする同窓会で、大学と社会の交流の核となり、国内にとどまらず国際的にも貢献することを目的としています。全学同窓会は、部局同窓会と連携しつつ卒業生、学生、教職員の交流の場を提供し、情報発信や人的交流、学術研究、教育及び学生の支援など全学的見地から様々な活動を行っています。

昨年度は、以下の活動を行いました。そのうち、主なものについて述べます。(1) **卒業生の名簿管理システムの整備**：Web上に名簿管理システムが公開され (<https://web-honbu04.jimu.nagoya-u.ac.jp/nual/>)、卒業生・修生生の認証が可能になりました。全学同窓会では、名簿委員会を中心に、システムの共同利用に向けて検討を始めています。(2) **財政基盤整備**：支援会員の募集、支援会費自動引き落とし利用者の拡充を図っています。また、名古屋大学カード(年会費永年無料)の利用代金の一部が全学同窓会に還元されるため、加入者の増加を図ることを検討しています。(3) **拠点形成**：関東支部、遠州会、関西支部との連携・支援、9番目の海外支部となるウズベキスタン支部を設立しました。現在、台湾支部設立に向けて準備中です。(4) **全学同窓会活動の運営基盤整備**：第6回ホームカミングデイ(10月16日)に併せて総会を開催しました。ホームカミングデイには、約4,500名の参加者があり、多彩な催し物が行われました。今回のホームカミングデイでは、海外支部長を招聘し関連行事を開催しました。また、名古屋大学では、昨年度「国際交流貢献顕彰制度」を新たに設け、ホームカミングデイでその貢献を称えることにしました。第1回は、韓国支部長の王成宇先生、バングラデシュ支部長のモハメッド・サイドゥル・イスラム・カーン先生

に授与されました。(5) **学生支援**：名大祭への協力、全学同窓会寄付講座「キャリア形成論」の支援などを行ないました。「キャリア形成論」は、産業界、法曹界、職業会計人、行政サービスなど様々な分野で活躍されている本学出身者が、それぞれのテーマに沿って講義をするもので、学生にとって大変好評な講義になっています。(6) **大学支援**：名古屋大学基金活動の支援、ホームカミングデイの共催、大学支援事業の実施などをおこないました。(7) **広報活動**：全学同窓会 Newsletter の発行、ホームページの刷新などを行いました。

次期役員体制では、丹羽副会長が中華人民共和国特命全権大使に任命され、民間機関などの役職全てを退かれましたが、全学同窓会副会長職は継続していただけることになりました。また、代表幹事については、投票の結果、現在の代表幹事である伊藤義人教授(工学部・工学研究科同窓会)が再選されました。

最後に、農学部ブランドの日本酒について述べさせていただきます。この日本酒は、農学部に植えられている八重桜から分離した花酵母を用いて造られた清酒で、卒業生である北本則行氏(愛知県産業技術研究所食品工業技術センター)と分子細胞機構学講座の加藤雅士氏(現名城大学農学部)が中心となって開発したものです。全学同窓会では、この日本酒を名大ブランドとして広めるために、学士会館精養軒(結婚式場)に置くことにしました。学士会館内には、7帝大を紹介するコーナーがあり、名大コーナーに展示する予定になっています。学士会館にお出かけの際は、是非お訪ね下さい。

なお、名古屋大学全学同窓会についての情報は、下記ホームページをご覧ください。

<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/>

事務局だより

事務局では農学部同窓会会員録データの改定を行っています。転居および転勤の際は、同窓会事務局 (dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp) までご連絡下さい。

今後も会員の皆様からのご質問・ご要望にお答えしてまいりたいと考えております。ご支援・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

会員のみなさんからの寄稿

名大農学部桜酵母と酒米により
醸した日本酒が誕生しました

北本 則行（昭和61年食品工業化学 M 卒業）
平成22年度農学部同窓会講演会で紹介しました名大農学部の日本酒が、教職員、在学生、卒業生の協力で出来上がりました。私たちは産官学連携の共同研究体制で平成21年度愛知県知的財産活用促進事業費補助金を活用して、農学部キャンパス内の八重桜より分離した酵母をもとに、良好な香りおよび旨味成分を生成し、高濃度のアルコールを生成する清酒酵母「名大桜酵母」を開発しました。平成21年12月に試験醸造を行ったところ、アルコール度数が12～13%と低く、アミノ酸が多く含まれ、ほんのり甘酸っぱいワインタイプであり、従来の日本酒とは一線を画す味わいの日本酒を試作することができました。本試作品を、平成21年度の名古屋大学農学部の卒業式謝恩会等に提供し、100名以上の名大関係者（主に20歳台）に試飲してもらったところ、84%の方が「美味しい」と評価し、特に普段飲酒しない20歳台女性の93%から「美味しい」との評価を得ました。

平成22年6月には、「名古屋大学農学部発日本酒プロジェクト」として名古屋大学地域貢献特別支援事業（総長裁量経費）に採択され、在学生の協力を得ながら、フィールド科学教育研究センター、東郷フィールド（附属農場）において酒造好適米「若水」の田植えを6月に行い、10月に稲刈りをしました。収穫した「名大農場米」と「名大桜酵母」とによる醸造を12月から行い、純米酒として製品化しました。「名大桜酵母」と「大学合格」のイメージを重ねあわせた名称を予定していますが、現在検討中です。出来上がった純米酒は4月より名大生協から販売される予定です。

年度を重ねるごとに、関係者周辺における本活動の認知度が上昇しており、各方面から問い合わせが増えていることから、供給量が不足気味になることが予想されています。今後、本プロジェクトでは、「名大農場米」の生産量を増やすとともに、学生のさらなる積極的な参加を可能にすることで教育効果を高めるようにしたいと考えています。



思いつくまま東南アジア

前田 達郎（昭和47年林産学科木材機械卒業）
林産学科、昭和47年卒業になります前田と申します。我々の学年は大学入学と同時に東大安田講堂封鎖騒動に続いて、全国的に大学紛争が地方へ波及していった時期でした。教養部から学部へ移る時は紛争の真っ最中で、教養部最後の試験の殆んどがレポート提出になりました。当時、小生、ヨット部に属しており、勉強そっちのけで全日本インカレを目指して血道を上げておりました（4年の時慶応、同志社について3位でした）。今思いますと、知らないうちに大学を卒業してしまった印象を持っています。機械の福井先生を始め、寺澤先生、浅野先生、など懐かしく思い出しています。特に物理の木方先生の追試を受けた事が大きな思い出になっています。昨年、お元気なお姿を見るに付け、このことが思い出されます。

小生、卒業と同時に愛知県大口町にある兼房（株）に就職しました。国内営業を経験したあと、30歳（1980年）の時に思いもよらず、インドネシアに出張する事になりました。当時、インドネシアはあちこちで合板工場の建設が始まり、合板工場向けの刃物であるベニヤナイフ（原木をかつら剥きにする）、鋸（高速回転で合板を定尺に切断）などの市場調査と売り込みが目的でした。希望していたとはいえ、ジャカルタハリム空港に降り、その臭いと、トタン屋根、裸で水浴びをしているのを見て、これはえらい国に来てしまったと思ったものでした。その後30年間、60歳で定年を迎えた2008年末まで30年近くを3回の赴任で東南アジアに駐在した事になります。既に神話の時代となっていますが、繰言として披露したく思います。

出張ベースから第一回駐在（1981年～87年末）になりました。スハルト政権下にあったインドネシアは、70年初頭に始まった第1次投資ブームに続いて80年頃から始まった第2次の投資ブームの頃でした。当時は国全体が貧しく、よく裸足の子供を見かけたものです。

初めて出張した当時は合板工場が10数社でしたが、その後も建設ラッシュで、第1回目の赴任が終わり帰国する時には100社を越えていました。インドネシアの西はスマトラのメダンの西にあるランサの町から、東はセレベス、アンボン（香料諸島）と各地を歩き回っていました。車で4時間、スピードボートで4時間のような移動はしょっちゅうでした。電話の事情も悪く、ジャカルタからカリマンタン（ボルネオ島）への電話も半日かかりでした。まさに兼房探検隊でした。

82年に女房と娘がインドネシアに来ました。日本食も未だ殆んどなく、スーパーの片隅にある味噌も劣化して真っ黒でした。シンガポールに出張した時は、伊勢丹で日本食をしこたま買い込み、空港の税関を旨く通過する事ばかり考えていました。何もない時代でしたが、それでも、あの頃の生活が一番楽しかったと、小生も女房も感じています。

第一回目の駐在では、83年3月、86年9月の2回、通貨ルピアの切り下げに遭遇しました。当時、ドル建ての販売が難しくルピアで売り掛を建てていました。一夜にしてドル、ルピアのレートが変わってしまいました。売り掛を原資として、ドル建てで日本へ支払う形態を取っていましたが、切り下げにより原資が目減りする事になり、相当の金額がどこかへ消えてしまいます。

最初の切り下げの時は、頭では分かっていたのですが、スーパーは店を閉めてしまうし、ジャカルタの街が閑散とした状態になり、通貨の切り下げとはこういう事かと醒めた目で見ていました。86年には、合併で工場を設立しました。日本人2名、現地従業員20名足らずの工場でした。後任の指導と引継ぎで1年ほど駐在したあと本帰国しました。

再び、インドネシアに赴任する事になりました(1990年～95年)。久しぶりのインドネシアはタクシーも新車が増え、今まで草むらであった所にビルが次々と建っていました。高速道路の建設も進んでいました。スハルト政権は成熟期を迎え、数年後に起こる騒乱の予兆は感じられませんでした。

我々が商売の対象とする合板業界もますます隆盛を極め、140工場近くが稼働を始めていました。インドネシア各地の代理店の整備もこの時期に完了しました。日本の住宅着工も1987年には170万戸の水準を維持し始め、合板業界も日本向けの輸出に活気を呈していた時代です。

こんな事から、従来の工場が手狭になり、ジャカルタの東部に土地を取得し、移転をする事になりました。問題は従業員の通勤をどうするかということでした。当時、既に60名を越えており、一時はバスでの送り迎えをしていました。工場の近くの土地、持ち家の取得の資金を貸し付ける事にし、2～3名を除いた皆が引越しをしてくれました。数年のうちに土地の評価額は高騰し、今ではとても購入できないくらいになりました。兼房を信じて、ついてきてくれた事を彼らに感謝すると共に、彼らにとって良かったと思う事です。1995年末に今の工業団地に移転を完了し、任期を終え帰国しました。

1996～99年の東京勤務が終わり、2000年、3回目のインドネシア駐在をする事になりました。スハルト大統領辞任後、何人も大統領が代わり、林業政策を含め、政策に一貫性がなく、朝令暮改が良く有ったようです。環境保護の意識の高まりの反面、盗伐材が横行するようになりました。さらに、日本が南洋材合板から針葉樹合板への切り替えを始め、日本向けの合板の輸出が大幅に減ることになりました。従って、合板工業は衰退の一途をたどることになり、今では20～30工場に激減しています。

3度目のインドネシアは、増えに増えた車の大渋滞でした。兼房の工場は合板向け以外の刃物の生産を増やし、従業員も200人を越えようとしていました。

人材も順調に育っており、もはや日本人が口を出す必要がない分野もありました。1年半のジャカルタ駐在の後、シンガポールに1年半、シンガポール事務所を閉めた後、最後はマレーシア・クアラルンプールに5年以上駐在をした事になります。

言語の話になりますが、東南アジアの中国人(主に、シンガポール、マレーシア)の殆んどが、4～5か国語を話します。小生のアシスタントはマレーシアの中国人でしたが、中国語(北京、広東、福建語)、マレー語、英語を旨く使い分けます。

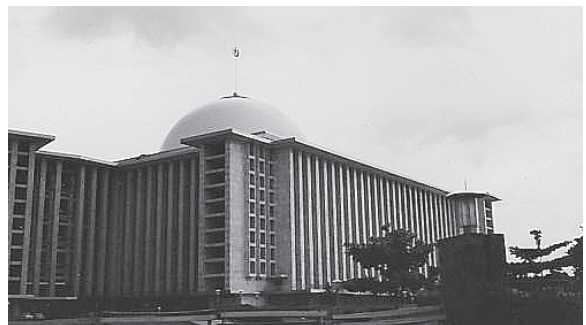
漢字が全く読めないのにはびっくりしますが、この程度の言葉を喋る人は全く珍しくありません。一つの言葉しか喋らない日本人の方が特殊です。ただ日本語の微妙なニュアンスを彼らの言葉で表現できるかは疑問に思っています。

これから海外に行かれる若い人がいると思いますが、幾ら言葉が旨くなくても、しっかりした知識、技術、信念がないと直ぐに限界に突き当たると思います。

定年になる半年前だったでしょうか、ジャカルタで各地の代理店を集め会議を行いました。代理店の連中が定年の記念として皆で金のロレックスの腕時計を送ってくれました。思わず目頭が熱くなりましたが、宝物として大事にしていこうと思います。代理店の連中も、最初に会った時は独り者、結婚したばかりの連中でしたが、今では子供がアメリカで働いていたり、イギリスに留学中との話を聞くに付け、随分時が過ぎたと思う事です。

思いつくまま、筆を進めてきました。まだまだ書くことはありますが、この辺で止めようと思います。来年(2012年)の4月までは兼房におります。機会があれば、また東南アジアの事をお話したいと思います。

お元気です……



理化学器械・研究設備・光学機器・ガラス器具

主要取扱メーカー

アズワン	三洋電機
東京理化	タイテック
旭硝子	日本エドナー
久保田商事	アドバンテック東洋
名古屋三立製作所	



〒468-0066 名古屋市天白区元八事一丁目33番地
 TEL 052-831-8800
 FAX 052-834-4117
 E-mail: mizuhorika@k2.dion.ne.jp

理科研はバイオ研究に欠かすことのできない
 試薬・機器の販売を通じ
 人類の幸せと豊かな社会の実現を願っています



- 本社 名古屋市守山区元郷二丁目107番地
〒463-8528 TEL 052-798-6151(代) FAX 052-798-6157
- 岡崎営業所 TEL 0564-57-1751(代) FAX 0564-57-1757
- 福井営業所 TEL 0776-52-1651(代) FAX 0776-52-1653
- 岐阜営業所 TEL 058-240-0721(代) FAX 058-240-1082
- 津営業所 TEL 059-224-6661(代) FAX 059-224-6671
- 四日市営業所 TEL 059-326-0231(代) FAX 059-326-3577
- 静岡営業所 TEL 054-256-3751(代) FAX 054-256-3755



市民環境調査・ビオトープづくりのサポートから
 環境GIS解析・カーボン・オフセット評価まで

〒444-0071 愛知県岡崎市福熊町山神戸7-12
 E-mail: kogushige@gfken.com 携帯: 090-3162-1439
 Tel: 0564-47-7970 Fax: 0564-47-7967

グリーンフロント 岡崎市 検索

コミュニケーションの進化に対応する



印刷を核に情報産業を担う企業として、
 新時代のコミュニケーションの輪を
 拡げています。

- 本社 〒448-0025 愛知県刈谷市幸町2-2
TEL(0566)24-5511/FAX(0566)26-0200
- 名古屋本部 〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20
TEL(052)871-9190/FAX(052)889-1410

農学部同窓会事務局では、広告の募集をしております。本会報の発行部数は、現在約7,900部で、
 本学農学部関係者に配布されています。会社の広告、同窓会の通知などにご利用下さい。

詳しくは、同窓会事務局まで。